

抗生物質まみれの豚たち

病気を生み出す狭い飼育環境

劣悪な豚舎は
何百メートルも
手前から、悪臭
が漂ってきます。
ひどいところは
何キ口にも
わたって悪臭が



漂うほど。この強烈なアンモニア臭をもっとも近くで吸っているのが豚たちです。だから、肺炎を起こしている豚が多いのです。ひどい悪臭は糞尿の中で悪玉の腐敗菌が増殖しているために出ています。善玉の発酵菌が優勢ならほとんど悪臭は出ません。腸内細菌が多いか善玉が多いかは、糞の臭いによって判断できます。豚舎の臭いが強いと、病気にかかりやすい環境で、豚は不健康に暮らしているわけです。

豚はのん気そうに見えても、デリケートで清潔好きな動物です。本来なら、成豚は腕や足が重なり合うように寝たり、糞の上に寝ることもありません。しかし、鉄柵で囲われたコンクリートの狭い畜舎で飼われていると、重なり合いながら寝るしかなくなります。そして糞尿まみれになってしまうのです。こうしたストレスで、豚は尻尾をかじり合ったりするようになります。

添加物だらけの「完全配合飼料」も豚にはストレス

その上、豚の生理に合わない配合飼料をエサとして食べさせられています。ビタミン剤やアミノ酸などを配合して、わざわざ「完全配合飼料」と呼ぶほど栄養分のバランスが考えられ、成長促進剤として抗生物質を入れ、消化を良くしてエネルギーのロスをなくすために、粉状にした飼料です。

豚はもともと雑食性で、消化に悪いものも平気で食べます。ところが消化の悪いものを食べると、消化エネルギーをロスしてしまうので、完全に消化するよう粉に近い飼料にしているのです。粉の飼料は豚にとって消化が良すぎて、すぐに胃の中が空っぽになります。そのためストレスがたまり、胃潰瘍が起きてしまう問題のある飼料が以前出回っていました。その後、エサが胃の中で糊状になって消化に時間がかかるような対策がとられ、とりあえずは食べてすぐ体調を崩す飼料はなくなりました。

しかし、穀物を粉にすると、油脂成分が酸化しやすくなるので酸化防止剤が添加され、カビも生えやすくなるので梅雨時から夏には毒性の強いカビ防止剤が添加されます。カビ防止剤は分解しにくいものが多いので、カビは生えなくても、豚肉に危険性が生じています。

こうして添加物だらけで抗生物質も入った不自然な配合飼料を、豚たちは食べさせられています。過密で不衛生な場所で飼われたうえに、このようなエサですから、豚のストレスは極大になり、出荷前には半数以上が病気にかかっているのです。



(『食べ物から広がる耐性菌』日本子孫基金・編)